

力持ちのお姉ちゃん

三好^{みよし}仁子^{にこ}

私の家では、毎年秋になると稲かりをする。コンバインを使わず、バインダーで稲をかり、はぜかけをして天日干しする。その作業を家族全員で行うのだ。まず父が稲をかり、その後、みんなではぜを作る。はぜとは、三本の木を組み合わせて三きやくのように立て、そこに竹をかけ渡したものである。は

ぜが出来上がったら、父と母が稲束をはぜにかけていき、姉と私と弟は稲束を運んだり、両親にそれを渡したりするのが仕事だ。去年の稲かりでは、私は稲束をいくつかまとめて運んだり、力仕事もたくさんこなせた。しかし、一昨年までは重たい荷物はほとんど運べなかった。

ある時、父に、

「その稲束を持ってきて。」

と言われたことがあった。姉も母も祖母もみんな手が離せなかったため、私を持つていくことになったが、父に言われた数の稲束をまとめて、持ち上げることすらできなかった。

「どうしたらいいんだろう」と困っていたら、姉が手伝いにきてくれた。軽々と運んでいく姉が、かっこよくて、私も姉のようになりたいと思った。けれど、そのあと「もう一度がんば

るぞ」と稲束を運ぼうとしたら、姉がさっと持つていったり、父や祖母から頼まれるのが姉ばかりだったりして、私には、ぜんぜんお手伝いすることがなかった。私は、「どうしてお姉ちゃんばかりなん。」とくやしなくてくやしくて、一人家の中でポロポロ涙を流した。

それから、私は、力仕事ももっとできるように、積極的に重い荷物を運んだりとチャレンジしていった。そして、去年の稲かりのときに、とうとう姉が持ち上げていたあの重たい稲束を私も持てるようになったのだ。姉に一步近づいたようで、すごうれしかった。そうしたら、父や祖母から頼まれる作業がだんだん増えていった。目が回るくらいいいそがしかったけど、そのこともうれしかった。

きれいな秋空の下、太陽の光を浴びている稲を姉と二人眺めた。おいしい米が出来上がるのをワクワク待ちながら。「お姉ちゃん、あの時重たい稲束を私の代わりに運んでくれてありがとう。お姉ちゃんがてきばきと動く姿がかっこよかったですよ。」今度私が、天日干しされた新米で、姉の好きな具をいろいろ入れて、爆だんおにぎりをいっぱい作ろうと思った。